

自 己 評 価 書

(令和元年度)

令和2年3月

鳴門教育大学附属中学校

目 次

I	学校の現況及び目標	1
II	重点目標に対する自己評価	2
1	主体的・対話的で深い学びの実現	2
2	いじめの防止	7
3	自己有用感の育成	13
III	自己評価根拠資料一覧	18

本校の使命に関する取組状況



I 学校の現況及び目標

1 現況

- (1) 学校名 鳴門教育大学附属中学校
- (2) 所在地 徳島市中吉野町1丁目31番地
- (3) 学級等の構成
 - 1 学年 4 学級 2 学年 4 学級
 - 3 学年 4 学級 計12学級
- (4) 生徒数及び教員数(令和元年5月1日)
 - 生徒数 415人 教員数 24人(正規教員)

2 目標

(1) 目的・使命

本校の目的は、附属中学校校則第1条において「小学校における教育の基礎の上に、心身の発達に応じて、義務教育として行われる普通教育を施すとともに、鳴門教育大学（以下「本学」という。）における生徒の教育に関する研究に協力し、かつ、本学の計画に従い学生の実習等の実施に当たることを目的とする」と定めており、本校は義務教育を行う任務とともに、教員養成大学の附属中学校として、次のような使命をもった学校である。

- ① 大学と一体となって、教育の理論及び実践に関する科学的研究を行う研究学校としての使命
- ② 鳴門教育大学の学部学生の実地教育（教育実習）及び大学院生との教育実践研究等を行う使命
- ③ 教育界の課題の解明に努め、関係機関と連携し、本県中学校教育推進に寄与する使命

(2) 教育目標

本校は、校則第1条に示されている中学校教育の目的の達成のため、次の教育目標を掲げ、めざす生徒像・教師像・学校像を明確に示している。

知・徳・体の調和的人格の完成をめざし、自主・自立の精神、創造的能力、豊かな人間性をそなえ、国際社会の発展に寄与することのできる心身ともにすこやかな中学生を育成する。

めざす生徒像

- 目標を持ち、自主的、創造的に学ぶ生徒
- 強靱な意志と体を持ち、たくましく生き抜く生徒
- 優しく思いやりの心を持ち、人につくす生徒

めざす教師像

- 生徒を愛し、生徒とともに伸びる教師
- 強い使命感、鋭い教育観をもった教師
- 優れた指導力をもった教師

めざす学校像

- 創造的な知性を磨く学問学校
- 情熱的な意志を鍛える鍛錬学校
- 強健な身体を練る体育学校
- 敬和奉仕の精神に生きる人間学校

(3) 令和元年度重点目標（実践事項）

- ① 主体的・対話的で深い学びの実現
 - ア 生徒の興味・関心を喚起する楽しい授業の創造
 - イ 見方・考え方を働かせる学習指導の充実
- ② いじめの防止
 - ア 生徒同士が本音で語り合い、繋がる活動の工夫
 - イ 温もりのある居心地のよい環境づくりの推進
- ③ 自己有用感の育成
 - ア 何事にも挑戦する姿勢、失敗から学ぶ姿勢の育成
 - イ 目標の設定と振り返りを通して、自己を見つめられる場の設定

(4) 令和元年度評価項目（評価指標）

- ① 主体的・対話的で深い学びの実現
 - ア 保護者対象アンケート（7月と1月に実施）
「先生は、話し合い活動やグループ活動を充実させている」
「生徒は一人一人の生徒の学習状況を理解し、力がよくなる指導している」
 - イ 教職員対象自己申告による目標管理（2月）
「学習指導」
- ② いじめの防止
 - ア 保護者対象アンケート（7月と1月に実施）
「学校は教師と生徒、生徒相互の人間関係が円滑である」
「自分の子どもは、学校で居心地の良さを感じている」
 - イ 教職員対象自己申告による目標管理（2月）
「児童生徒指導等」
- ③ 自己有用感の育成
 - ア 保護者対象アンケート（7月と1月に実施）
「先生は、生徒の長所を認め、指導を行っている」
「附属中学校の生徒は、何事にもあきらめずに挑戦する姿勢が見られる」
 - イ 教職員対象自己申告による目標管理（2月）
「学級経営・学校運営・校務の処理・その他」

Ⅱ 重点目標に対する自己評価

重点目標 1 主体的・対話的で深い学びの実現

新しい中学校学習指導要領の移行も2年目となり、本校でも全面実施に向けてそれぞれの教科目標を達成すべく試行錯誤をする中で、「深い学び」の授業展開への手ごたえも徐々に感じられるようになってきた。しかしながら、予測不能な社会と言われる、子供たちがこれから生き抜いていく令和の時代に必要な、新学習指導要領が求めている「学びの質」が十分に高まっているかと言えば、まだまだ課題も多い状況が見受けられる。その予測不能な社会について、内閣府からは「Society5.0 =超スマート社会」と示されているが、そこで求められるのは文系・理系という枠を超えた課題解決能力であり、物事を多面的・多角的に捉え、自分の思いをしっかりと持ってそれを他者にわかりやすくプレゼンテーションできる、といった社会に生きて働く資質・能力である。

本校では、これまでの実践を踏まえ深い学びの実現に向けて、各教科の特質に応じた物事を捉える視点や考え方である「見方・考え方」に着目し、それらを働かせた深い学びが全教科で共通した流れでできるように授業設計モデルを構成し、それに基づいた学習過程を通して「社会に生きて働く資質・能力の育成」につなげようとして取り組んできた。

これからの社会において、「各教科で学んだことがどのように生きて働くのか」すなわち、新学習指導要領における改定のポイントである「何ができるようになるか」を教育活動全体を通して実践できるよう、本研究を推進しながら各教科の見方・考え方を駆使して、問題解決に向かう力をしっかりと育てていければと考えている。

そのために、今回総則に規定された「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善は、今までの取組を一つ一つ丁寧に見直すと共に、生徒の実態を十分に把握することとこれからの未来に必要な力を我々がしっかりと具体的に理解することが重要であるという共通認識の元に、授業設計モデルを考えた。そこでは、「学習課題を把握する場面」から始まり、「学習課題に取り組む場面」、「共有する場面」、「発展させる場面」の四つの場面で授業を構成することとし、この一連の流れを「1 サイクル」として、各場面で働く見方・考え方を明確にした。それによって、より質の高い「社会に生きて働く資質・能力」の育成につながると考え取り組んだ。

学習課題を把握する場面



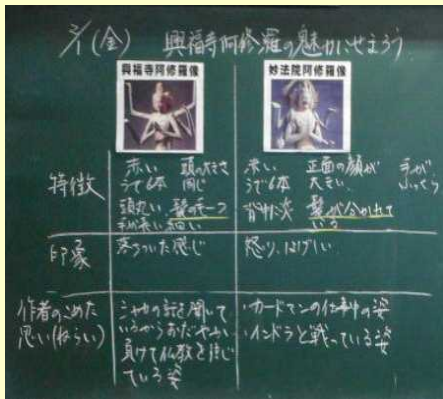
(技術・家庭科の技術分野でプログラムの参考に気象庁のサイトを利用している場面)

学習課題を把握する場面



(理科で大阪城のバランスの悪い巨石を船でどうやって運んできたかを考えている場面)

学習課題に取り組む場面



(美術科で同じ阿修羅像の造形の違いをその誕生の背景から考える場面)

学習課題に取り組む場面



(社会科で日本やイギリスが行った植民地支配を多面的に捉えてまとめている場面)

共有する場面



(数学科で箱ひげ図を利用して見方・考え方を働かせて説明している場面)

共有する場面



(社会科で国民年金制度の存続についてその有無を見方・考え方を働かせて考える場面)

発展させる場面

(2) 一番よいと思うミートソースを一つに決定しましょう。その理由や根拠も考えましょう。

ミートソース	理由
A	<ul style="list-style-type: none"> 価格が安く、内容量が多い。また、早く調理することができる。 1年以内に食べることが出来る スパゲッティが付いている

5. 選んだミートソースとその理由を書きましょう。視点や選択肢が変わった場合はさらに1や2に色ペンで付け足しておきましょう。

ミートソース	理由
F	<ul style="list-style-type: none"> トマトを買って作るよりも、缶詰の方が安い。冷凍食品の味がおいしい。 家族の人数に合わせて量を調節できる。添加物が多いものは避ける。

6. グループ討議2

メモ: 味、価格、他人の健康を考慮する

どうにかお肉を減らす
家族の健康(分量) ... 多い方がおいしいけど、健康(お肉の減らす)
3人分を1回で調理できる(A) 調理方法
自分好みのアレンジ ... 自分の調理経験

最終決定	理由
F	<ul style="list-style-type: none"> 余分なお肉を減らすことによる健康への配慮 家族の体調(アレルギー)と分量、お肉に合わせて作ることもできる(アレンジ)

(技術・家庭科の家庭分野で市販のスパゲッティ・ミートソースの中から選んだものを条件を加えて再考することで、見方・考え方を働かせ自分の考えに応じて最適化させる場面)

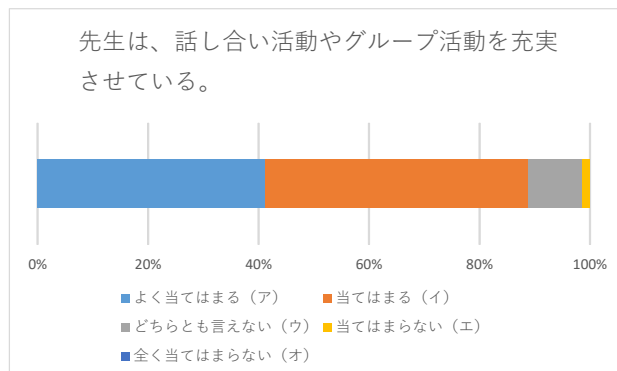
2 評価項目の状況

(1) 保護者対象アンケート

「先生は話し合い活動やグループ活動を充実させている」目標80%以上

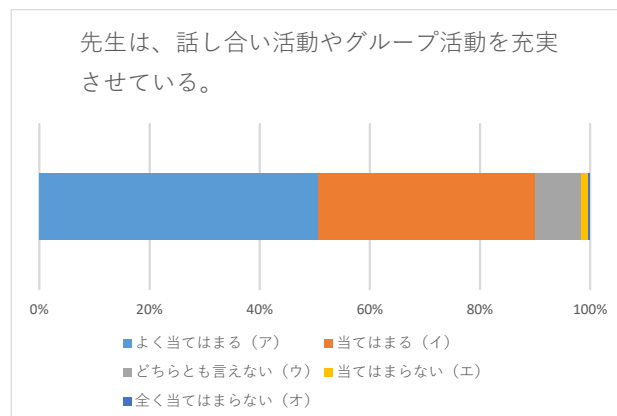
第1回（7月） 88.76% （昨年度95.39%）

よく当てはまる	41.21 %
当てはまる	47.55 %
どちらとも言えない	9.80 %
当てはまらない	1.44 %
全く当てはまらない	0.00 %



第2回（1月） 90.02% （昨年度91.69%）

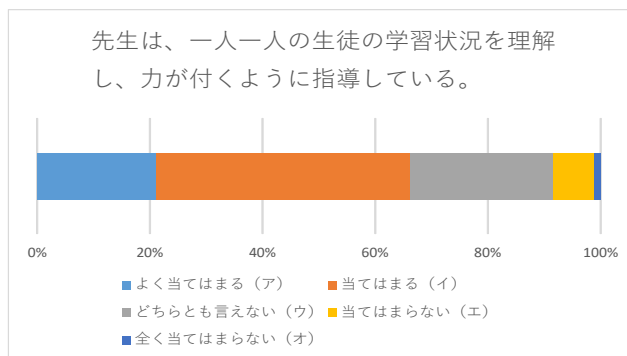
よく当てはまる	50.67 %
当てはまる	39.35 %
どちらとも言えない	8.36 %
当てはまらない	1.35 %
全く当てはまらない	0.27 %



「先生は一人一人の生徒の学習状況を理解し、力がつくように指導している」目標80%以上

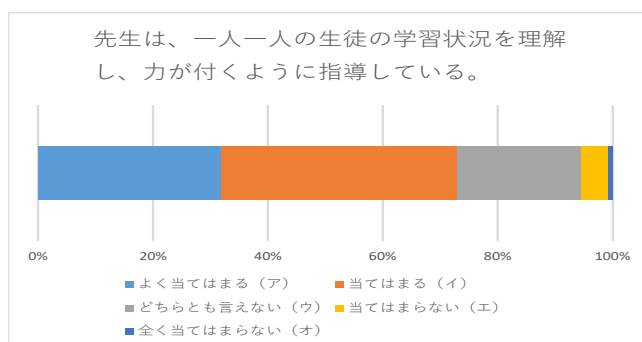
第1回（7月） 66.19% （本年度から）

よく当てはまる	21.10 %
当てはまる	45.09 %
どちらとも言えない	25.43 %
当てはまらない	7.23 %
全く当てはまらない	1.16 %



第2回（12月） 72.92% （本年度から）

よく当てはまる	31.90 %
当てはまる	41.02 %
どちらとも言えない	21.72 %
当てはまらない	4.56 %
全く当てはまらない	0.80 %



(2) 教職員対象自己申告による目標管理

ア 生徒の興味・関心を喚起する楽しい授業の創造

当初申告	最終申告	評価
本校の研究に沿った授業を展開し、子供の興味・関心を高め、科学的な思考力・判断力A評価の生徒75%以上を目指す。	見通しを持って授業実践や研究授業を行うことができた。補助教材も作ることができ子供の興味・関心を概ね高められた。	B
英語科における「主体的・対話的で深い学び」を実現するために、授業の工夫・改善を図る。	プレゼンテーションを用いた学習活動を取り入れ、子供は意欲的に参加できた。4技能・5領域の中の「聞くこと」の継続的な指導がもう少し必要であった。	B
生徒同士が意見を伝えられる道德の授業の工夫・改善を行い、生徒の興味・関心を高められる授業に取り組む。	課題に応じてネームプレートを使って生徒が自分の意見の考えを表出する機会を設けることができたが、活発な意見交換ができていない場面も見られた。	B
本校の研究目標に沿って、課題解決学習を充実させ、科学的な思考のA評価が80%以上になるように、授業を工夫する。	どの領域においても、生徒が今まで以上に意欲的に取り組む新展開の授業を3つ作ることができ、概ね8割がA評価に達した。	A
生徒の社会的事象に対する興味・関心を高める授業を実践し、暗記強化であるという認識にならないように努めつつ、基礎基本の定着を図れるように取り組む。	生徒の興味・関心が高かった単元では、積極的に話し合い活動を取り入れる場面を多く設定したので、意欲的に授業に参加できていた。	A

イ 見方・考え方を働かせる学習指導の充実

当初申告	最終申告	評価
見方・考え方を働かせた公民的分野の授業を構想し、実践する。	毎時間、発問や板書の工夫を行うことで、生徒の発言やワークシートの記述の中に、見方・考え方が表れるようになった。	A
知識の習得のみに偏重せず、見方・考え方を働かせる学習指導を行っていく。	単なる知識の習得に終わらず、その過程や本質を理解するための対話活動ができた。	B
社会的な見方・考え方を働かせた思考力・判断力・表現力を育成する。	思考力等の育成を目指し、中単元において地理的、歴史的な見方・考え方を働かせた授業を実践することができた。	A
英語科において、InputからOutputにつながる授業を工夫しながら、見方・考え方を働かせる学習指導の充実を図る。	既習表現を用いて、発話させるように活動は工夫できたものの、達成感を感じさせる活動の工夫が足りなかったため、Outputを意識した活動を更に取り入れたい。	B
技術分野の学びが、生徒にとって、これからの人生の中で役立つと実感出来るような授業を実践する。	授業の中で、日頃の生活を振り返らせて、役立つことが実感できるように、話題を具体化することで様々な意見が聞けた。	B

3 評価項目の達成及び取組状況の自己評価

(1) 優れた点（成果）

- 新学習指導要領の移行も2年目となり、新学習指導要領の目指すこれからの社会に生きる子供たちに必要な力をつけるために、教科横断的なアプローチが見られるようになってきた。また、毎年実施している研究発表会では、毎年続けることで課題の解決策をスムーズに各教科で試行し、成果に結びつけることができ始めている。
- 保護者対象アンケートやオープンスクール時のアンケートにおける「楽しく分かりやすい授業」に関する項目の評価は、本年度も高かった。楽しい授業をベースに更に子供たちの探求心を高め、深い学びへつなげていきたい。
- 本校の研究発表会での授業実践を見て、県教委から「本校の実践を本県の学力向上に向けた、授業力向上に生かしたい」との申し出を頂き、今年度本校としては初めて、県教委主催の教育課程研究集会に本校から4教科の教員が講師として招聘され、授業の様子等を紹介した。

(2) 改善を要する点（課題）

- 共有する場面において、ペアやグループ活動を取り入れたとき、その活動が単なる意見交換や教え合いで終わってしまうこともあり、学習内容があまり深まらないこともあった。また、教師が生徒に問いかけたり、発問したりしたとき、そのやりとりが一問一答式になってしまうこともあった。今後は対話的な学びの視点も考えていく必要がある。
- 教科横断的な取組はまだまだ始まったばかりで、他教科同士の教員が話し合う時間や他教科における自分の担当教科の単元に関する内容の取扱いをしっかりと知って授業に生かすことが、子供の探求心が一層高まり、それによって深い学びが実現できるものとする。

以上の内容を総合し、4段階中の「 B 」と判断する。

自己評価の基準	A 十分達成されている
	B 達成されている
	C 取り組まれているが、成果が十分でない
	D 取り組みが不十分である

* 評価項目ごとの自己評価の基準は、以下同じ

重点目標 2 いじめの防止

いじめ問題については、本校においてもその防止に向けて、全校一丸となって取り組んできた。

しかしながら、今年度は3年生でいじめが原因で、いじめを受けた生徒が長期欠席となる「重大事態」が発生し、いじめ防止対策推進法に沿って文部科学大臣に報告し、大学に学長、理事を中心とした大学関係者11名と本校の管理職と学年主任で対策協議会を立ち上げ、月1回以上のペースで経過報告を元に改善策を協議してきた。他学年でも部活動や学級内でのいじめ事案が生じた。本校では、年3回実施するいじめに関するアンケート調査等の結果を分析し、取組が適切に行われたか否かを検証し、期待するような改善が見られなかったような場合には、その原因を分析し、取組内容や取組方法の見直しを行ってきた。しかし、アンケートで詳細に状況が確認できなかったことから、早期発見に至らなかったケースもあった。

アンケート調査では、結果を周知する際に、担当者から生徒へ向けたメッセージも加えてきた。相談体制については、週1回のスクールカウンセラーに、気軽に相談できる雰囲気が浸透し、利用する生徒、保護者も増えてきた。

また、いじめ防止に向けた道徳や特別活動における、教材や活動の工夫については、常に学年ごとに相談しながら同一歩調で進め、授業での様子や授業後の子供の感想等について、学年会を開いて確認しあっている。また、各学年ともに年間に3回ほど生徒と担任の二者面談を行い、子供たちが抱えている悩みや思いを聞くことから、子供の表面的には見え辛い心情の変化を掴むことで、いじめの早期発見に努めようとしている。

<いじめの防止のための組織や体制> 「附属中学校いじめ防止基本方針」から

いじめの防止等の対策のための組織（校内生徒指導委員会）

① 組織の構成

管理職員、主幹教諭、生徒指導主事、いじめ防止担当、学年主任、養護教諭により構成し、この組織を生徒指導委員会と称する。個々のいじめの防止・早期発見・対処に当たっては、その事案に関係の深い学級担任、部活動指導者等の教職員、及びスクールカウンセラーを追加する。なお、必要に応じて、心理、福祉等に関して専門的な知識を有する大学教職員等の助言を得る。

② 組織の役割

- 学校基本方針に基づく取組の実施や具体的な年間計画の作成・実行・検証・修正を行う。
- 生徒・保護者や教職員からのいじめの相談・通報の窓口となり、報告を受ける。
- いじめの疑いに係る情報や生徒の問題行動などに係る情報の収集と記録、共有を行う。
- 緊急会議を開いて、いじめの情報の迅速な共有、関係のある生徒への事実関係の聴取、指導や支援の体制・対応方針の決定と保護者との連携を行う。

教育相談体制

- 教職員、生徒及び保護者、さらには生徒間の好ましい人間関係の醸成に努める。
- 生徒の個人情報に配慮するとともに、「教職員に相談すれば、秘密の厳守はもとより、教職員は必ず自分を助けてくれる。」という安心感や信頼感の醸成に努める。
- 定期的な教育相談（二者面談・三者面談）週間や相談日等を設定するなど、生徒はもとより、保護者も気軽に相談できる体制を整備し、保護者からの相談を直接受け止められるようにする。
- 相談の内容によっては指導を継続し、必要に応じて医療機関等の専門機関との連携を図る。
- 生徒や保護者に対して、広く教育相談が利用されるよう、学校の内外を問わず多様な相談窓口について広報・周知に努める。

1 実践事項への取組

(1) 生徒同士が本音で語り合い、繋がる活動の工夫

本校は附属小学校から入学してきた者が7割近くおり、幼稚園、小学校の頃から交流がある生徒は多いものの、他の小学校から入学してきた者や部活動での先輩との出会いによって、思春期でもあることから人間関係の悩みを多かれ少なかれほとんどの生徒が有している。様々な葛藤を通して、人として成長してもらいたいが、そこでの教師の関わりも時として大きな意義があると考ええる。

そこで、本校伝統の多くの学校行事を通して団結を強めるとともに、周りへの気配りができ、そして達成感が味わえるように、担任を中心に目配りをして子供たちの成長に繋がるよう支援をしている。体育祭や文化祭など盛り上がる行事が多いが、そういう中で常に中心にいる生徒ばかりではなく、それらが得意でない生徒の居場所や存在感をクラス全員で共有できる手立てを考えている。そして、これらの行事はいつも教育実習の時期と重なるので、実習生にもこのあたりの関わり方を話すとともに、5～6年前には同じ中学生だった実習生からの率直な意見を聞くことも新鮮であり、参考になっている。

また朝の挨拶運動では、生徒会を中心に毎朝元気な声が校門付近に響き渡っている。「元気に呼びかけるだけでなく、笑顔で温かい気持ちを届けよう」と常に話しており、形だけでなく心のこもった自然な挨拶が交わせることを目指しているが、まだまだの感がある。教師にも子供を育てるという意識をしっかりと育てていきたい。校長が朝短時間ではあるが校門前で登校してくる生徒だけでなく、行きかう人々や高校生、そしてゴミを出しに来た御近所の方々や校門前で徐行してくれる東西に走る車全てに簡単な会釈をしているが、わざわざこちらを見て、笑顔で返してくださるドライバーが段々と増えてきて、温かい気持ちを楽しませてもらっている。果たして自分がドライバーだったらと、考えてしまう。アンケートでも「自分の子どもは本音を言える友達がいる」の答えがほぼ9割あることはありがたいが、この友達関係が固定化しすぎることなく、その友達関係がさらに繋がっていく場をしっかりと教師は支援して子供たちに仲間の大切さや充実感を更に味わわせたい。



(朝の登校風景)



(休み時間のベンチでの語らい)



(体育祭：縦割りクラスでのエール交換)



(文化祭：心をついにハレルヤ合唱)

(2) 温もりのある居心地のよい環境づくりの推進

子供たちが安心して学校生活を送るために、環境の与える影響は大きい。行き届いた清掃や、安全な校舎や教室はもちろんのこと、休み時間にもこやかに子供と語らったり、廊下で子供の様子を見守ったりすることで、それらに対する教員の負担は大きいですが、手を抜くことなく、環境づくりを進めている。大学側にも限られた予算の中から、人的加配や物品購入、修繕費の増額などをお願いし、前向きに対応いただいている。子供たちは与えられるだけでなく、自分たちでより温もりのある環境づくりをめざし、その中で人を非難することばや暴言が無くなることを実感することで、いい循環が生まれつつある。



(玄関ホールに技術部員製作のテーブルベンチを設置)



(ボランティア部による朝の清掃活動)



(休み時間の教室の様子)



(担任との二者面談の様子)



(保育園児と一緒に避難訓練)



(学校周辺の町内会の方々と一緒に除草作業)



(今年購入した公用車が大活躍)

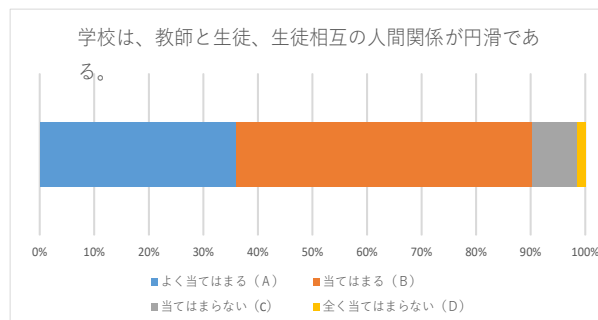
2 評価項目の状況

(1) 保護者対象アンケート

「学校は、教師と生徒、生徒相互の人間関係が円滑である」 目標80%以上

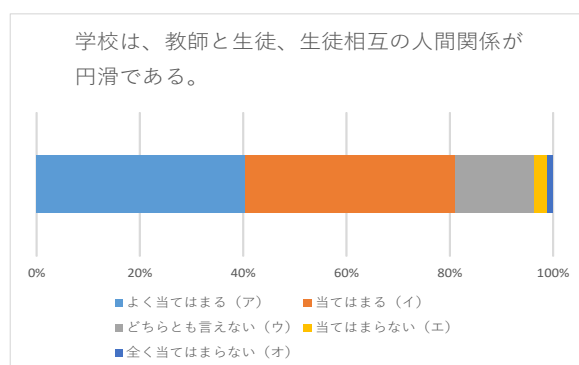
第1回（7月） 80.74% （昨年度88.76%）

よく当てはまる	35.34 %
当てはまる	45.40 %
どちらとも言えない	15.23 %
当てはまらない	3.74 %
全く当てはまらない	0.29 %



第2回（1月） 80.96% （昨年度72.91%）

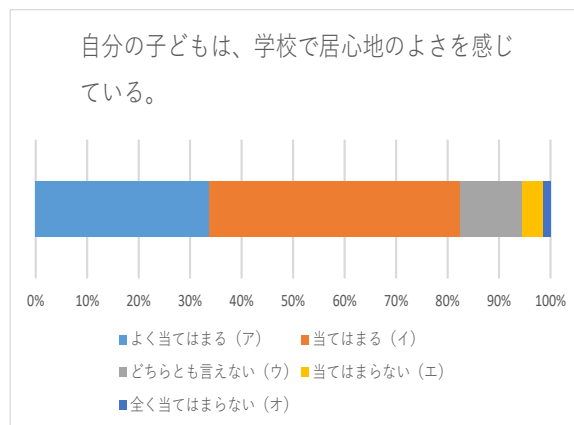
よく当てはまる	40.48 %
当てはまる	40.48 %
どちらとも言えない	15.28 %
当てはまらない	2.68 %
全く当てはまらない	1.07 %



「自分の子どもは、学校で居心地の良さを感じている」 目標80%以上

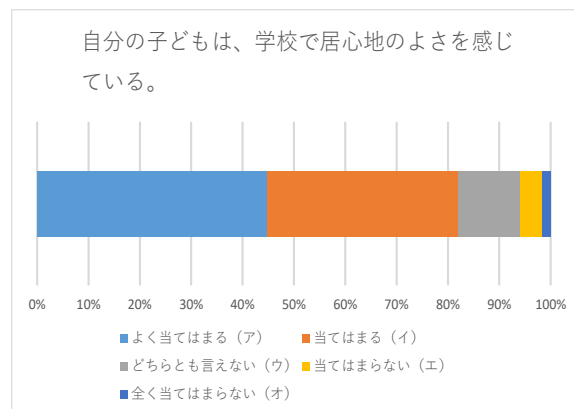
第1回（7月） 82.47% （本年度から）

よく当てはまる	33.62 %
当てはまる	48.85 %
どちらとも言えない	12.07 %
当てはまらない	4.02 %
全く当てはまらない	1.44 %



第2回（1月） 89.03% （本年度から）

よく当てはまる	53.87 %
当てはまる	35.16 %
どちらとも言えない	7.74 %
当てはまらない	1.61 %
全く当てはまらない	1.61 %



(2) 教職員対象自己申告による目標管理

ア 生徒同士が本音で語り合い、繋がる活動の工夫

当初申告	最終申告	評価
毎日の授業中や休み時間、昼食時などに対話を通して、他人を思いやり、大切にできる心を育てる。	生徒との対話を通して、各自が相手との距離感を考えながら、人間関係を形成していることが伺える場面が増えてきた。	B
子供同士の繋がりを深めるために、生徒が語り合える活動や場面を、生活班で一人一役の役割を与えて、お互いに助け合える場面をつくっていく。	道徳の授業では、全員が一回以上発言できるようになり、素直な意見が聞かれるようになった。また個々の意見を学級通信で紹介すると語りあえる仲間が増えてきた。	A
生徒同士が繋がる活動の工夫をし、教師と生徒、生徒同士の距離が縮められるようにする。	朝、教室に早めに行って、生徒の様子を観察し何気ない会話をすることで、生徒同士も打ち解けて話ができる場面が増えた。	B
一人一人の生徒と良好な人間関係を築き、生徒が相談しやすく、信頼される存在になることで、生徒同士の関係も高めていく。	毎日全員とは言葉は交わさなかったが、丁寧に生徒に向き合えた。生活記録もほぼ全員が提出でき人間関係は醸成できた。	B
生徒自身が自己を見据え、成長していくための指導や働きかけを行っていく。	受容と共感を軸として子供に接してきたが、まだまだ十分な理解には至らなかった。	B

イ 温もりの有る居心地のよい環境づくりの推進

当初申告	最終申告	評価
授業の前には、休み時間から授業に行き、生徒と共に過ごす時間を少しでも確保するようにし、温かい雰囲気の中で授業を始める。	休み時間の子供たちの様子を見て、たわいもない会話を交わしながら、安心、安全な環境の中で授業実践が概ねできた。	B
朝、昼、放課の前には、教室および廊下の見回りに行き、子供と接することで心情の変化に早く気づけるように心がける。	毎日朝は、始業30分前、昼食時は食事の前と後、学年の教室前に行って子供の様子を見て、気になるところは担任に伝えた。	A
朝は登校してくる生徒と積極的にコミュニケーションを取り、クラスを巡回して、少しの変化にも早く気づけるようにする。	廊下や教室を回することで、子供たちと話す機会が多く取れた。しかし、消極的な生徒とはどうしても会話が続きにくかった。	B
生徒の居場所づくりにつとめ、グループエンカウンターを授業の中でも積極的に取り入れる。	子供たちが学校生活にも慣れ、行事を通してクラスの団結が高まってくると、グループエンカウンターは効果が出てきた。	B
生徒に目標の設定や振り返りを行わせることで、自己を見つめると共に、秩序を守った学年集団になることで、生活しやすい温かい雰囲気が生まれることを理解させる。	生徒の不用意な発言で仲間を傷つけるような場面があっても、長年いるものとして共通理解と指導について先生方に十分な指示ができず、子供の指導も遅れてしまった。	C

3 評価項目の達成及び取組状況の自己評価

(1) 優れた点（成果）

- いじめ防止担当者を配置して、小学校へ毎週月曜日にT2として出向き、児童の実態把握と共に、小中連携の強化に取り組んだ。
- 保護者対象アンケートや全国学力・学習状況調査の生徒質問からは「学校が楽しい」と感じている生徒や保護者は多い。
- 帰りの学活等における内容を工夫し、子供同士の活動の場面を増やすとともに、積極的に二者面談を取り入れ、学級・学年の実態把握に日々努めてきた。

(2) 改善を要する点（課題）

- ふとした子供の表情や言動から、苦しんでいる子供の実態を見抜く力と情報共有が足りなかった。また、いじめ事案が起きてから、その初期対応に組織的な対応が不足していたため、該当生徒や保護者を苦しめてしまった。このことを十分に振り返り、今後に生かしていかなければならない。
- 道徳教育や人権教育には、各学年ともに十分に教材研究し、話し合ってから取り組んでいるものの、取組後の様子を検証し、学校生活に生かしているかどうかの確認と共通理解が不十分であった。授業や活動を終えてからの学年団での話し合いを十分にしていける必要がある。

以上の内容を総合し、4段階中の「 C 」と判断する。

- | | |
|---------|----------------------|
| 自己評価の基準 | A 十分達成されている |
| | B 達成されている |
| | C 取り組まれているが、成果が十分でない |
| | D 取り組みが不十分である |

* 評価項目ごとの自己評価の基準は、以下同じ

重点目標 3 自己有用感の育成

自己有用感が身につく、その意識が高い子供は、自尊感情が高く、自分の行動にも自信が持てるようになる。そしてそれらの自信は他者への思いやりのある言動に繋がり、他者と協働できると共に、自主的・自律的な生活ができるようになることも多い。本校では、昨年よりこの自己有用感の育成に取り組んできたが、まだまだ自分に自信を持って生き生きと生活できている生徒は多くなく、どちらかと言うと、周りの目を気にして自分の存在を価値あるものとして受け止められていない生徒が多くみられるため、本年も引き続き自己有用感の育成を重点目標に定めることとした。

1 実践事項への取組

(1) 何事にも挑戦する姿勢、失敗から学ぶ姿勢の育成

昨年に引き続き「何事にも挑戦することの重要性」を全校集会など機会を捉えて子供たちに話してきた。「部活動で、勝利することや成績を向上させることも立派な挑戦ではあるが、決してそれだけが挑戦する要素の全てではない。今まで十分に取組めなかった身近な学校生活、挨拶や清掃活動など、あらゆることに対して、今までの自分から一歩踏み出して挑戦し、そこで得られるものをしっかり味わって欲しい」と呼びかけた。当然ながら挑戦がすべて成功することはなく、むしろ失敗の方が多い。2年生、3年生の中には、昨年からの取組で失敗してもそこに学びがある、挑戦しないままで後悔するより、一歩踏み出そう、という前向きな言動も昨年に比べて増えてきた。1年生も部活動などを通して先輩の取組から影響を受け、積極的な言動が入学当初に比べて、多く見られるようになってきた。そして、それらの取組が自己有用感を高めることに結びつくためには、子供の挑戦を認め、しっかり褒めることで自分の行動や存在がしっかりと認められていることを実感させたい。



(市総体でのソフト部の優勝)



(市総体で最後まで粘ったサッカー部)



(市総体での剣道部の活躍)



(全国大会出場を決めたお弁当コンクール)

(2) 目標の設定と振り返りを通して、自己を見つめられる場の設定

挑戦につきものの失敗から学ぶ大切さを味わった子供たちが次に、同じ挑戦をすることなく簡単に目標を変更したり、再チャレンジへには結びつかない例も多く見られた。そのために、自分を取り巻く、身近なことに目を向けて、せっかく挑戦しても失敗したからとあきらめるのでは無く、なぜうまくいかなかったのか、その過程を振り返ることでしっかりと自己を見つめ、目標の設定を含めて再度挑戦する姿勢を養うことの大切さを伝えてきた。そうすることで、簡単にあきらめるのではなく、挑戦し続ける態度が少しずつ育まれ、それが自信へと繋がり、そこには自分の存在感を実感できている生徒の姿も見られだした。今後も、様々な行事や学校生活の中で、子供たちが挑戦した後、その過程を振り返り自己分析をすることで、あきらめない姿勢が育まれるよう、粘り強く子供たちに関わっていきたい。



(文化祭の吹奏楽部の演奏)



(中学校最後の文化祭での3年生の演劇)



(授業中の様子：徳島市特別活動研究授業)



(高知大附属中との交流学习の様子)



(附属幼稚園児と一緒にいった募金活動)



(3年生による模擬県議会の様子)

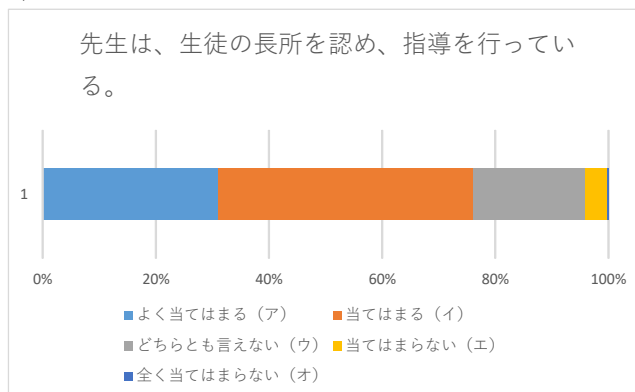
2 評価項目の状況

(1) 保護者対象アンケート

「先生は、生徒の長所を認め指導を行っている」目標80%以上

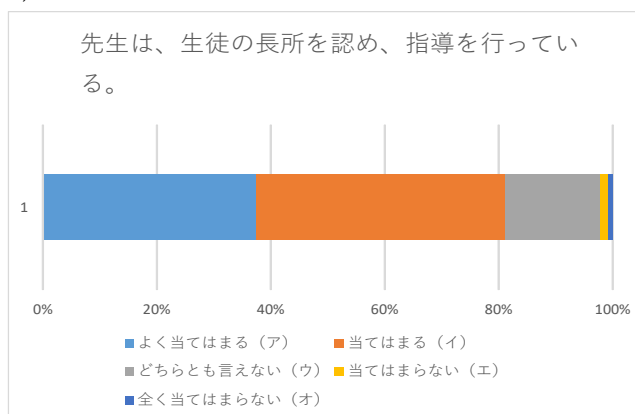
第1回（7月） 76.14% （昨年度86.73%）

よく当てはまる	31.03 %
当てはまる	45.11 %
どちらとも言えない	19.83 %
当てはまらない	3.74 %
全く当てはまらない	0.29 %



第2回（1月） 87.80% （昨年度80.97%）

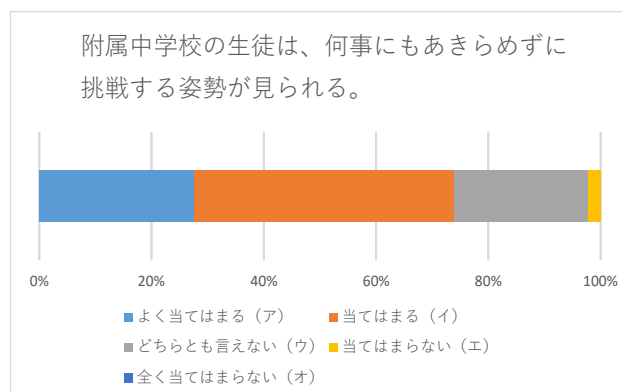
よく当てはまる	37.37 %
当てはまる	50.43 %
どちらとも言えない	16.67 %
当てはまらない	1.34 %
全く当てはまらない	0.81 %



「附属中学校の生徒は、何事もあきらめずに挑戦する姿勢が見られる」目標80%以上

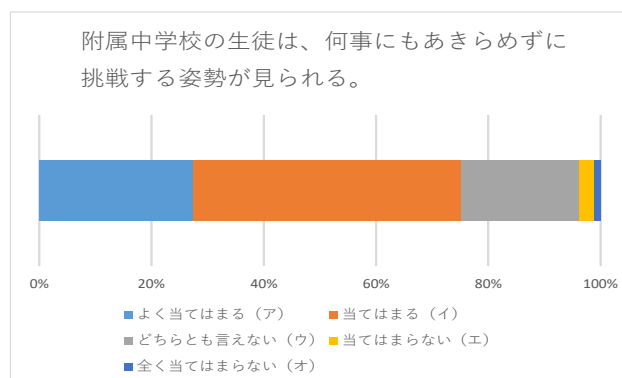
第1回（7月） 73.85% （本年度から）

よく当てはまる	27.59 %
当てはまる	46.26 %
どちらとも言えない	23.85 %
当てはまらない	2.30 %
全く当てはまらない	0.00 %



第2回（1月） 75.07% （本年度から）

よく当てはまる	27.35 %
当てはまる	47.72 %
どちらとも言えない	21.18 %
当てはまらない	2.68 %
全く当てはまらない	1.07 %



(2) 教職員対象自己申告による目標管理

ア 何事にも挑戦する姿勢、失敗から学ぶ姿勢の育成

当初申告	最終申告	評価
自分から大きな声で挨拶ができたり、返事ができる、礼儀を心がけるなど当たり前のことをしっかりできるようにさせたい。	4月当初にくらべて、挨拶はできるようになってきたが、大きな声での返事や時間を守ることはもう少し頑張らせたい。	B
生徒自身が意欲的・積極的に取り組める生徒会活動の在り方を工夫して、誰もが関わられるという自主性を育てたい。	文化祭や、エコキャップ、プルタブ集めなどにおいて、生徒をやる気にさせる活動ができるように支援できた。	A
積極的に生徒と関わりながら、生徒の良い点をしっかりと褒めて、伸ばす指導を心がけ生徒のやる気を引き出していく。	休み時間など、ふとした時に見つけた生徒の良さを学年で共有し、自信を持たせることができたので更に続けたい。	B
清掃や行事準備など、今まで手を抜きがちだったことにも積極的に取り組ませ、充実感を味わわせたい。	清掃や行事の準備、ボランティア活動などに取り組める生徒は増えてきたが、主体的にできている生徒はまだ少ない。	B
学校行事に進んで参加しようとする生徒を多く育てたい。そして、うまくいかなかったものを糧にして、更に頑張れるよう支援していきたい。	やる気が高まるように、声をかけることで、文化祭でも体育祭でも全力で取り組めた生徒が多かった。クラス全体の一体感が生まれるためには、何が必要なのかよくわかった。	B

イ 目標の設定と振り返りを通して自己を見つめられる場の設定

当初申告	最終申告	評価
クラスで4月に立てた目標を学期ごとに振り返る場を作りたい。そういう場を大切にすることが、一人一人の後の成長にも大きく影響することを理解させたい。	学期ごとにワークシートに振り返りを記入することで、うまくいかなかった原因も冷静に分析でき、次回へ備えようとする生徒が多かった。	B
自分の生活を振り返り、自分の健康問題に気づき、生活習慣病を改善しようとする気持ちを高めたい。	様々な具体例を示すことで、生活習慣の改善や、がん検診の受診への意識は多くの生徒の間で高まった。	B
目標の設定と振り返りを通して自己を見つめられる場の設定をすることで、自己有用感の育成を図り、それを進路選択にも有効に活用してもらいたい。	生徒は目標設定シートを記入することで、自分を客観的に見つめられ、自己評価も概ねできていた。ただ、継続をするというのが難しく、子供たちが続けやすい方策をもっと考えなければいけない、と思った。	B

3 評価項目の達成及び取組状況の自己評価

(1) 優れた点（成果）

- 失敗してもすぐにあきらめない姿勢を支援することで、それが挑戦する意欲へと繋がってきた。
- 失敗のあとの振り返りが出来だすと、目標の設定についても自分をより詳細に分析して考えられるようになってきた。
- うまくいかなかったとき、それまでの過程を振り返ることで、もう一度挑戦しようとする姿勢が見られるようになってきた。

(2) 改善を要する点（課題）

- 自分を見つめ直すことより先に、他者が気になる生徒も多く、自己をじっくりと見つめることが目標設定にも良い影響を及ぼすことを実感させる必要性を感じた。
- 失敗から学ぶために、その過程を振り返る際に、あきらめの気持ちが先に来る生徒も多く、個々に応じた支援が必要であった。

以上の内容を総合し、4段階中の「 B 」と判断する。

- | | |
|---------|----------------------|
| 自己評価の基準 | A 十分達成されている |
| | B 達成されている |
| | C 取り組まれているが、成果が十分でない |
| | D 取り組みが不十分である |

* 評価項目ごとの自己評価の基準は、以下同じ

Ⅲ 自己評価根拠資料一覧

	観点番号	資料番号	添付	別添	資料名	備考
1	1・2・3	参考資料1	○		令和元年度学校評価アンケート結果 (保護者対象アンケート集計結果)	
2	1・2・3	参考資料2		○	教職員対象自己申告による目標管理自己 評価結果	資料回収
3	1	参考資料3		○	令和元年度全国学力・学習状況調査結果 (学力調査)	資料回収
4	2	参考資料4		○	令和元年度学校生活アンケート集計結果	資料回収
5	2・3	参考資料5		○	令和元年度全国学力・学習状況調査結果 (生徒質問紙)	資料回収
6	1・2・3	参考資料6		○	令和元年度オープンスクールアンケート 結果	資料回収